

キーワード：保健科教育 実践的指導力 教員養成機関 模擬授業

## I. 研究の背景

近年、子どもの健康問題は、小児肥満、アレルギー、感染症、ストレス等、多様化しており、その原因も複雑化している。このような背景のもと、学校の保健科教育を充実させることで、子どもたちに生涯を通して健康課題に適切に対応できる資質や能力を育成することが求められている。また、そのためには、教師の保健科教育における実践的指導力を向上させることの必要性が指摘されている。これまでの研究では、指導力の構成要素を教科指導力やマネジメント力などと定義し、授業研究を行うことで、指導力を向上させることができると報告されている。また、指導力の育成のためには、教師が自信を持って指導できることが重要であると報告されている。しかしながら、体育や他教科での授業研究の効果を報告した研究は多くあるものの、保健科教育を対象として、指導力の改善を目指して実施された研究は極めて少ない。

## II. 研究の目的

本研究は、教員養成系の大学で保健体育の教員免許の取得を目指す学生を対象として、保健科教育に関する指導力の実態を把握し保健科教育の指導力を向上させるような教育プログラムを開発すること、さらに、開発された教育プログラムの効果を検討することを目的とした。

## III. 研究の方法

本研究では、2014年10月から2015年1月に、地方国立大学の教育学部において開講された「中等保健科指導法演習」を受講した34名を対象とした。本研究では、保健科教育に関する指導力を構成する要素として、1)保健科の専門的知識(以下、専門的知識)、2)指導法に関する知識(以下、指導法の知識)、さらに、3)指導するための自信(以下、指導の自信)、の3つの観点を設定した。授業研究は全4回実施し、指導力を構成する3つの観点に関して、専門的知識と指導法の知識については1回目の授業研究前と各授業研究終了後に、指導の自信については1回目の授業研究前と4回目の授業研究後に調査を実施した。調査について、専門的知識と指導法の知識に関しては、教科書と教員採用試験で過去に出題された問題、学習指導要領解説保健体育編からテストを作成し、指導の自信に関しては渡辺の研究を参考に、将来の教員志望度(2問)、過去の経験(5問)、保健の授業を行う自信(4問)、各単元を教える自信(19問)、自覚・意欲・関心(15問)、授業実践力(12問)の全53項目で質問紙を構成した。データの分析は専門的知識と指導法の知識のテストの点と指導の自信の質問紙の回答を数値化し、前後のデータをWilcoxonの符号付順位検定を用いて比較し、また、Spearmanの相関分析を用いて評価した。なお、本研究は信州大学倫理委員会の承認を得て行った(承認番号H25-20)。

## IV. 結果と考察

回答に不備があった学生を除く男子21名、女子6名をデータ分析の対象とした。

### 1.保健科教育に関する指導力の実態

専門的知識の平均点は $23.2 \pm 6.4$ 点、指導法に関する知識は $7.0 \pm 2.3$ 点で、両者には、有意な相関が認められた( $r=0.53$ )。また、指導の自信と専門的知識及び指導法の知識の間には有意な相関は認められなかった。特に、指導の

自信がないテーマとして、自然災害、環境、ストレス、性教育の4つが挙げられた。また、保健科教育をうまく行う自信と教育実習での保健科授業の実施の有無の間には、有意な相関が認められた( $r=0.40$ )。

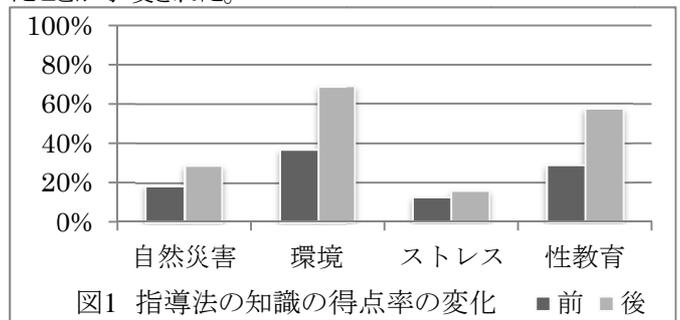
### 2.プログラムの開発

保健科教育に関する指導力の実態調査の結果をもとに、指導法の知識と指導の自信を高めるためのプログラムを開発した。プログラムでは、指導法の知識を向上させるために、授業研究を行う前の3回の講義で、受講学生に学習指導要領と教科書の内容を分析、発表させた。さらに、授業研究の中で、学習指導要領の重要箇所を確認する時間を設けた。一方、指導の自信を高めることを目的に、保健の授業を行う自信と相関の高かった、授業実践力の項目について、授業研究の中に取り入れた。さらに、各単元を教える自信のうち、指導の自信のないと回答した人数が多かった単元を授業研究のテーマとして設定した。

### 3.プログラムの成果と課題

#### 1)専門的知識及び指導法の知識の変化

授業研究の実施後では、授業研究で取り上げた4つのテーマ全てにおいて、専門的知識及び指導法の知識の双方の得点率が実施前に比べて向上した(指導法の知識に関して図1参照)。また、保健科教育の具体的指導法を知っていると回答する学生が有意に増加した( $p<0.02$ )。これらのことから、指導案作成やリフレクションを通して、学生の取り上げたテーマに関する理解や指導法に関する知識が身についたことが示唆された。



#### 2)指導の自信の変化

授業研究の実施後では、実施前と比べ、子供が深く考える保健の授業を行う自信があると回答した学生が有意に増加した( $p<0.01$ )。また、授業をうまく行う自信と、「子どもの実態把握」や「発達段階の考慮」といった授業実践力とに有意な相関が認められた。さらに、保健科教育を行う自信と教育実習での保健科授業の実施の有無とにおいても有意な相関が認められた。これらのことから、保健科教育を指導することに対する自信を高めるためには、子どもの実態をとらえ、子どもの発達段階に応じた保健科教育を行える自信を持つ必要があり、そのためには、教育実習内での保健科授業の実践機会や授業研究内で子どもの健康問題について学ぶ機会を提供していく必要がある。

## V. 結論

プログラムの実施の結果、保健科教育の専門的知識及び指導法の知識において向上が認められた。しかし、指導の自信についての向上は限定的なものだった。今後の課題として、授業研究の内容とテストの出題範囲を対応させることや、学生一人ひとりのグループ内での役割と指導力との関係性を明らかにすることが求められる。